

## ナラティブ事例研究と実践を基礎とした学び： R氏のケースの省察

ジョン・マクレオッド<sup>a,b</sup>

<sup>a</sup> オスロ大学心理学部

<sup>b</sup> 連絡先 ジョン・マクレオッド オスロ大学 Pb. 1094, 0317 Oslo, Norway

Email: john.mcleod@psykologi.uio.no

---

### 要約

ナラティブ事例研究ではクライアント、またはセラピストの視点からセラピーのストーリーが語られる。R氏のケースは、ナラティブ事例研究の形式を用いたケース考察が、セラピーの実践とプロセスについての深い理解と省察を与える手段となりうることを示す強力な一例である。R氏のケースの特筆すべき貢献を評者の個人としての学びとの関連から以下の領域に関して論じる。クライアントの問題における文化という文脈の意味を扱うこと、日常生活の中に働きかける修正的介入の創出、セラピストによって引き起こされた作業同盟の亀裂の修復、クライアントによるセラピスト像の内在化プロセスに関する新しい理解の構築、である。本事例の理論的意義について論じたあと、ナラティブ事例研究の方法論とセラピストの英知という概念への示唆も提示する。

キーワード: 文化, 日常生活, 模範的事例研究, 内在化, ナラティブ, 個人的意味, 理論的流動性, 心理療法プロセス, 英知

---

R氏のケースは、長年、日本の心理療法の領域で最も影響力をもつ人物の一人である、村瀬嘉代子氏の業績のうち、比較的数少ない、英語で発表された事例の一つである。この事例はまた、日本において、心理療法の理論と実践のエビデンスの基盤の重要な一部を形成してきた事例研究の豊かな伝統の一例でもある。そのためこの事例は、問題を抱える一人の青年のセラピーがどのように展開したか、という説明を超えて、文化的、専門的に重要な意味をもつ。提供された素材の豊かで多層的な性質ゆえに、本事例へのコメントの執筆は要求度の高い課題だった。以下の節ではこの事例に対する考察として、ナラティブ研究としての心理療法事例研究、R氏のケースへの省察から浮かび上がる実践に基づく学び、そして理論への示唆、の3点を提示する。

### ナラティブ研究の一形式としての心理療法事例研究

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

心理療法における事例研究の役割を考えるにあたり、ケースを基礎とした研究を大きく4つのジャンルに分類することが有用である (McLeod, 2010)。実践的事例研究 (pragmatic case studies) および臨床的事例研究 (clinical case studies) は、特定のケースにおいてセラピストの行動と介入を導いた専門的知識を記録することを目的にしている。実践的事例研究では、他の臨床家が多様なケースにどのように取り組んでいるかを学ぶことができ、セラピストとしての専門性の構築に役立つ。一方、ナラティブ (narrative) ・記述的 (descriptive) 事例研究は、セラピーの中で起こった出来事のストーリーを、クライアントかセラピスト (あるいは両方) の視点から語ることを目指す。この形式による事例研究の主な目的は、現在ある専門的なカテゴリを超えるような、記憶に刻まれる、生き生きとした描写を提供することで、セラピーについての理解を拡げることである。成果指向事例研究 (outcome-oriented case studies) は、特定の事例に対する特定の心理療法モデルの有効性に関する問いに答えることを目的に向けられている。この種の事例研究は、ある心理療法アプローチを、これまでとは異なるクライアント群に適用する際、推定的証拠 (the prima facie) を立てるために使われるのが一般的である。理論構築型事例研究 (theory-building case studies) は、ある理論モデルが特定のケースにおける観察とどの程度一貫しているかを系統的に分析することでそのモデルを検証、構築し、明確に提示することを目指している。全ての心理療法事例研究は、実践的、ナラティブ的、成果指向的、そして理論構築的要素を包含している。しかしながら多くの事例研究論文は、専門誌の規定の範囲内で十分に一貫した説明を提示するために、上記のうち、一つか二つの目的に絞っていることが多い。

“R の事例”は明らかに実践的事例研究である。なぜならばこの事例は本誌の投稿ガイドラインに沿って発表されており、セラピスト・筆者のもつ専門的知識への洞察を提供しているからである。しかし、いくつかの重要な側面においては、ナラティブ事例研究でもあり、ケースの中で展開していくドラマに読者を参加させるような効果をもたらしている。評者自身、このコメントは一個人として第一人称を使わずには書けないと感じた。評者のこの反応は、R 氏のケースが力強く効果的なナラティブによる報告であるという事実を反映していると思っている。R 氏のケースは専門的実践に根ざしつつ、その範囲を超え個人的な反応を呼び起こすような形で、普遍的な人間の重要な問題にふれている。

ある事例に関してナラティブの記述を提示するとは、どういうことであろうか。ナラティブ事例研究のアプローチは、ケースのデータを構成する他の方法や分析方法とどのように違うのだろうか。R 氏の事例は、ナラティブ研究 (Riessmann, 2008) におけるそうした中心的な要素を描き出している。ケースについての情報の大部分は語りの構造をなしており、文脈から始まり、出来事の説明と

評価が続き、結尾部分で終わる。これは、診断や治療モデルなどの専門的なカテゴリに沿ったケースの情報提示とは大きく異なっている。

この事例論文では、筆者が自分自身を熟練し、権威ある専門家ではなく、一人の普通の人間として位置づけることによって、その語りとしての特質がさらに強調される。例えば「R氏の事例を取り上げてお話しすることについて、多くの逡巡があった。(p.J-20)」といった箇所や、筆者が自身の家族生活の情報を提供し、さらに(心理臨床家ではない)自分の母に、クライアントの行動について相談したことを語っている(p.J-39,40)箇所にそうした点が見られる。日常を「語る」のではなく「見せる」という形で提示するその語りの質は、事例の中でもセラピー内で起こった具体的な出来事や瞬間に関する詳細な説明という形で反映されている。対照的に、他の種類の心理療法事例報告では、一般化された、あるいは包括的な行動パターンの説明に依拠することが多い。またR氏のケースは、出来事が複数の声によって、いわば多声的に説明されることで、ナラティブの対話的な性質を反映している。ストーリーは、セラピストーナレーターとしての権威的な声だけでなく、セラピスト自身の内なる声や、クライアントやその家族の直接の発言と書き示された言葉によっても語られる。ナラティブの「見せる」側面、あるいは語りの能動行為的な側面は、さらに登場人物の身体的な説明によっても伝えられている。

R氏は黒縁眼鏡をかけ、青ざめてやせすぎ、18歳とは見えず、30歳近い印象。怒りと倦怠感と猜疑心がない交ぜになったような表情(p.J-27)。

フィクションやドラマでもよく見られるこうしたケースの表現は、目的に向けて展開する人間行為の生きられた体験の中に、読者を招き入れるための方略を表している。こうした種類の文章は、ある程度の曖昧さや不確実さを生み出す。それは、分析的、科学的、専門的なカテゴリで把握されるもの以上の「何かがありそうだ」という感覚である。そうした感覚は、読者の中に感情や記憶を喚起することで、個人的な反応を引き起こす。

何が良いナラティブ事例研究をつくりだすのだろうか。ナラティブ事例報告の質を評価する基準は何だろうか。これらは重要な問いである。他の心理療法事例研究に比べて、これまでに発表されたナラティブ事例研究の数は比較的少ない(McLeod, 2010)。ここにはパラドックスが潜んでいる。原理的には、ナラティブ事例報告をまとめることは比較的単純なはずだ。他の形式の心理療法事例研究は、プロセス指標や効果指標などのデータ収集と分析を必要とするが、対照的にナラティブの説明は単に書くための(あるいは話すための Quinn, Schofield and Middleton (2012)を参照)時間をとるだけでいい。評者自身は、ナラティブ事例研究の発表数が少ない理由を、ナラティブ論文が知

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

識の構築に妥当な貢献をしているかをどう判断していいかわからないため、筆者・研究者や査読者、編集者が不安を感じていることに起因しているのではないかと、とも感じている。またそうした不安によって、ナラティブ事例研究の潜在的な書き手は、新しいプロジェクトを試みることに躊躇してしまっているのではないかとも思う。Quinnら（2012）によるナラティブ・理論構築型事例研究や、ナラティブ・実践的事例研究であるR氏の事例論文は、こうした研究手法で何が探求できるのかを提示しているという点において、質を示す模範であり、心理療法研究のコミュニティ全体に価値ある役割をもっている（McLeod, 2014）。こうした研究は、ケースを理論的、研究的文脈におきつつ、詳しく説得力あるナラティブによる説明を提供し、クライアント、セラピスト、そしてセラピーの場の特徴に関する事実を豊かに伝えてくれる。

## R氏のケースの振り返りから現れる実践に基礎をおく学び

事例研究を含む心理療法研究の多くは、理論命題の妥当性を証明することを最終目的において設計されている。研究者の課題は、読者を納得させるような「if-then（もし～ならば～こうなる）」命題へのエビデンスを提供することである。例えば、もし、この心理療法モデルが使われるならば、よい結果が生まれる可能性がある、あるいは、もし、提供された心理療法がクライアントの好みに合っていたらならば、クライアントが心理治療を中断する可能性が低くなる、といった具合である。この“if-then”命題が複数の研究で裏付けられたならば、その命題は実践を導くものとして本格的に受け入れられ始める。

対照的に、ナラティブ事例研究は“if-then”命題の妥当性を支持するためのエビデンスを提供することを目的にしていない。例えば、パーソナリティ障害や攻撃的行為の介入方法として、描画の使用が効果的である、という命題へのエビデンスを提供するケースとしてRのケースを引用するのはあまり賢明ではないと考えられる。ナラティブ事例研究を、エビデンスのソースとして捉えるのではなく、潜在的な学びの源泉としてみる方が適切ではないだろうか。学ばれる内容は、事例研究の読み手と、その人のもつ個人的な知識や理解の範囲に依拠している。「発達の最近接領域」の概念（Vygotsky, 1978）は、人が学べるものは、その人が既に知っていることやできること、そして成長の方向性によるという考えをもとにしている。その視点から考えると、Rのケースは多くの学びの可能性を提供してくれる。このケースによって喚起される学びは、セラピーの手順に関する情報によるものではなく（それもいくらかはあるが）、セラピーの作業に対する新しい見方（Berger, 1973）によるものである。

この後の節では、セラピストとして、研究者としての評者の、一個人としての発達の最近接領域と理解の範囲に関連して生じた学びをまとめてみる。

## 社会の縮図としての心理療法

R氏のケースは、ある水準では、一家族内の葛藤と緊張の説明として読むことができる。しかしこの論文の筆者は、より広い社会的出来事を反映するものとして読者をストーリーに引き入れてくれる。我々読者には冒頭から、セラピーが行われたのが「我が国が第2次大戦後の困窮混乱期から、経済復興の軌道を進み始めた頃である (p.J-20)」と伝えられる。また後に、読者は大学のキャンパスで起こった学生紛争が、電話での通信システムを妨害するほどのものだったことも知る。クライアントであるR氏は、スターリンやヒトラーといった「紛争の時代」の重要人物たちに夢中になっている若者である。彼は従来型の教育を捨て、ほとんどの時間を毒ガスの製作方法に関する情報を集めることに捧げていた。多くの読者はここで、近年の日本史の転換的瞬間である、1995年の地下鉄サリン事件を連想するかもしれない。R氏のケースとの関連でいうと、東京へのこの襲撃は、R氏の家族内での多くの行為と同様に、支配的な文化的価値に対する、誇大的でお門違いな反抗と捉えられる点が重要だと考えられる (Murakami, 2002)。実際、同じ時期に、自分の周囲の人たちの生活を破壊する方法として、無臭の毒ガスの製作方法を学ぶことに興味をもっていた若者が日本には数多く存在した。セラピーでの村瀬氏とクライアントとの関わり方の中で最も印象的だった点の一つは、R氏が自らの感情の文脈的・文化的側面を、面接の中で表現することを促進する能力を村瀬氏がもっていたことである。例えば、R氏の描いた絵や、暴力的で操作的な著名人に心酔する彼に対するセラピストのオープンで率直な反応の中にそれが見られた。また、彼の暴力的な妄想と、世の中の社会趨勢との類似部分があからさまなやり方で解釈されることはなかった。代わりにR氏は自分の人生の諸側面が、病理からくる症状としてではなく、現在おかれた状況を理解するための有意義な試みとして考えてもらえる場を提供されたのである。

この事例論文の中で筆者は、クライアントをとりまく広い社会と、もっと直接的で個人的な悩みのつながりを効果的に使う方法として、評者自身も特に有益だと感じた、二つの強力で記憶に残る一般原則を定式化している。一つ目は「複眼の視野で気づく (観察眼) こと」というシンプルな訓令だが (p.J-47)、二つ目は以下のようにもっと複雑である。

人は生まれ出るとき、自分に纏わる要因、すなわち生物学的素質、親、家族、民族、時代など、何一つとして選択できない。生まれたときの所与の要因は平等ではない。臨床においてはこの不条理に想いを致し、どのようなクライアントであっても、まず一度は無条件にその存在の必然性を受け

止めることが基本である。存在を受け止められたという安堵感がクライアントにその不条理を受け止めようとする姿勢を生じさせるのである (p.J-23)。

私はこれまで、人生の中で不公平な状況に直面したときの感覚を特徴づけるものとしての「存在の必然性」という概念や、(セラピーの文脈内で)そうした経験の中で「妥協 (reconciliation)」していくことが、価値のあるセラピーの効果であるとする見解に出会ったことがなかった。R氏のケースにおけるそうした側面は、社会的正義オリエンテーションとも表現しうる評者自身の臨床実践において、同じような実践との関連における一側面を、より繊細で創造的、かつ柔軟な方向に何歩か前進させてくれた。

## 日常生活に焦点化したセラピー介入

評者にとって、このケースの最も印象的かつ衝撃的だったのは、セラピストがクライアントとその両親を自分の家での夕食に招待した場面だった。評者は、これまでそうした提案をしたセラピストを一人も知らない。評者自身が活動する実践の環境においては、そのような行為は、クライアントとの境界の侵犯や過干渉を意味し、潜在的に非倫理的だとみなされることは間違いないだろう。もちろん、多くの認知行動療法セラピストが、クライアントの不安を喚起するようなホームワークの一環として、クライアントと一緒に飛行機に乗るなどの実践を行っていることをよく知っている。また Yalom (2002) が初回アセスメントの一環として、クライアントの家を訪問した例も知っているし、Dreier (2008) による心理療法と日常生活に関する研究プロジェクトのことも知っている。

R氏のケースの文脈では、夕食への招待は一つの介入として意味をもつし、セラピストは事前に注意深い内省を行っており、R一家全体がお互いに交流するという決定的な転換を起こすのに非常に効果的だった。どのような種類のセラピーであっても、一つの重要な課題は、セラピーという特別な場の中で起こりうる関係性のもち方や洞察と、村瀬氏がいう「現実の生活」の間の隔たりに橋をかけることである。R氏のケースでクライアントとその家族は、セラピストとその家族の日常の一端に参加することができた。このことは儀式化された具体的なイベント(食事)の中に、新しい関係的・感情的あり方を埋め込むような、特別な種類の“修正感情体験”の可能性を生み出したように見える。そしてもちろん、食べ物を分かち合うこと自体も多くの意味を持ちうる。

それでも評者は、自分がクライアントを夕食に招くことは考えられない。評者自身の文化のそれほど手の込んだ準備もせずカジュアルな食事スタイルと異なる、日本文化における食べ物と食事の時間の重要度の高さと、食事の慣習に関する共通理解の存在が、セラピストに家族の食事の時間をクライアントと共有することを容易にしたのかもしれない、とも感じた。しかしそこは特に大事な

点ではない。R氏のケースを読むことで得られるのは、クライアントを自分の日常に招き入れること、と説明されるようなセラピー方略の一例である。セラピストによっては、過去に自分自身の生活の中で、クライアントのもつ問題に似た問題を解決できたときの例を提示する自己開示を通じて、クライアントを自らの日常へと招き入れている。例えば広く使われている Lent, Hill and Hoffman (2006) によるカウンセラーの自己効力感尺度の項目の一つに「洞察の自己開示（自分自身が個人的洞察を得た過去の体験の開示）」がある。広い「セラピストの自己開示」のカテゴリの中には、例えば、既婚であることや特定の宗教を信じていること、そしてクライアントに対する即時的な反応を開示すること（「あなたが話しているとき、私は悲しく感じました」といった、自己を含んだ発言をすること）など、セラピストの異なる種類の行為が含まれている。日常生活での体験の自己開示は、セラピストの自己開示のカテゴリにおいて、クライアントに対処方法のモデルを示すこと、という特別なカテゴリとなりうるのかもしれない。

自己開示の一例として考えると、R氏のケースでの食事のエピソードにおける村瀬氏のアプローチが、興味深いことに以下に挙げる Henretty と Levitt (2010) が明確化した、効果的なセラピストの自己開示の諸原則の全てをふまえている。その諸原則とは、自己開示が、明確な根拠を背景にした意図的な行為であること、クライアントとの継続的交流の中で頻繁に起こりすぎないこと、クライアントに与える意味について熟慮されていること、言葉遣いに注意深いこと、クライアントへの影響をモニタリングすること、自己開示の後には、セラピーの焦点をクライアントに戻すこと、である。R氏のケースは心理療法の理論と実践のエビデンス基盤の構築にあたり、ナラティブ事例研究のデータが、クライアントへのインタビューや質問紙尺度など、他の手法によって得た知見に加えて、方法的なトライアングレーションの一部として使える価値をもつことを示している。また、これまでの研究ではっきりと強調されてこなかった、自己開示の新たなカテゴリの可能性を紹介することで、ナラティブ事例研究のもつ臨床的経験則としての価値も示してくれている。

R氏のケースの上記の側面について考察するうちに、セラピストがクライアントに対し自分自身の日常の一部に関わることを許すという心理療法が、一体どのようなものなのか考えるようになった。歴史上、心理的に問題を抱える個人が、コミュニティ内にいる感情的に「健康」とされる家族の中で生活する選択肢を与えられる伝統は存在した (Parry-Jones, 1981)。例えば自然療法 (Berger and McLeod, 2006)、野生と冒険療法 (Gass, Gillis, & Russell, 2012) そして、歩いて話すセラピー (walk and talk therapy: Revell & McLeod, 2015) など、野外でのセラピーの全てでクライアントは、セラピストが日常生活で起こる小さな問題（例えば雨が降っている）から、身体的な危険や極端な疲労を伴う大きな課題に至るまで、どのように対処するのかを観察する機会を提供される。クライ

エントがセラピストの日常生活にこうした形で参加することをどう体験するかについての研究は未だないと思われるが、もしこうしたセラピー介入がクライアントに害を与えるのであれば、彼らは倫理的な非難を受けているはずである。しかしそういった事態は起こっていないようである。

(“多重関係”に関する倫理的な側面の発展的議論は Lazarus and Zur (2002) を参照されたい。)

最後に、食事時間の介入を評者自身が理解するためには、そこで何が起こったかだけでなく、セラピストの視点からその正当性と意味について考える必要があった。村瀬氏は、セラピーの介入を、二つの対照的な視点から見ているようである。家族の食事は「日常生活の修正体験」すなわち「食卓で向き合って座って素直に話す機会 (p.J-36)」として捉えられる。同時に「純粋性を持ち...そのままに一人の人間としてそこにしようとした」というセラピストの表現にも見られるように、この介入は関係性の観点からも理解される。ここで彼女が見せるスタンスは、以前のセラピストが R 氏から相談を受けた時にとっていたような、専門家としての役割とは対照的である。こうした方略は自らの身体や人生をメディアとして使う、パフォーマンスアーティストが行うことに近いようにも思える。

R 氏のケースはこうした種類の活動がどのように維持、遂行されるかの枠組を提供してくれる。村瀬 (2015) は、セラピーの作業のシンプルだが深い原則を提示してくれる。もしセラピストが「自分の「時・所・位」をどう的確に認識 (p.J-46)」し、「抽象と具象とが裏打ちし合った言葉、自分の身体の中を潜らせ、臨場感をもってその意味を思い浮かべられるような言葉、そういう相手の心に届く言葉 (p.J-47)」を使うならば、クライアントは自分の人生のなかにある不正義との折り合いをつけられるようになり、自分の中にある「潜在している可能性、レジリエンス (p.J-23)」にもっと気づくようになる。あらゆる良いストーリーでみられるように、こうしたポイントは一度ではなく、文章の中の違う場所で違う形で何度か伝えられている。この点において、ナラティブ事例研究は、筆者によって伝えられる核となる意味へ入り口をいくつも読者に提供している。

## セラピストによって喚起された治療同盟の亀裂を修復する

Safran, Muran, & Eubanks-Cater (2011) や、その他の研究者による広範な研究は、クライアントが心理療法プロセスから身を引くこと、またはセラピストに対して批判的になることと定義され、治療同盟の亀裂を修復するセラピストの能力が、臨床的に重要性であることを明示した。そうした研究はクライアントとセラピストの間の治療同盟の構築は、常に直線的に進むプロセスではなく、心理療法プロセスの後退や危機によって時折中断されうるものであることを示した。しかし同時に、亀裂をうまく解消できれば、クライアントにとって他者とどうつながるかを学べる貴重な機会とな



J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

りうることもわかっている。一連の研究はまた、そうした危機を単にクライアントの転移反応の表れとして解釈したり、クライアント側の機能不全の兆候としてだけ解釈したりする人の方が、危機における自分の役割を認識し、協働的な方法でこの問題にアプローチする人よりも、そうした危機の解消に失敗することが多いことも明らかにしている。

R氏のケースは、9回目のセッションでセラピスト側から中止を申し出るといふ亀裂の描写においても稀有である。8回目のセッション後、セラピストは休みをとって、離れた地域に住む自分の家族を訪ねた。R氏はセラピストの家族の家に書留を送り、その家に火をつけると脅していた。その返事として、セラピストはもう面接を続けられないとクライアントに伝えた。彼は反抗しセラピーを続けるように彼女を説得した。このエピソードはセラピスト側からの決裂であり、主にクライアントの介入によって解決したと理解できる。このエピソードは事例論文の中で詳細に語られてはいないが、それでもナラティブによるケースの説明が、これまでの文献では十分にふれられなかった現象やプロセスを同定できるという、さらなる一例を見せてくれている。

おそらく、継続の同意の後に行われた9回目のセッションにおいて、R氏が村瀬氏に対して直接的な質問（「兵士になりたいか？」）を投げかけ、耳をそばだてて彼女の回答を聞き、その返事にショックを受け、怒りを見せたりしながら、彼女の自分を自分とは別の彼女自身の権利をもった人物であると扱うようになったのは、非常に重要なことだろう。そうした質問に続けて、彼は「どういふ言葉が人に本当に伝わると思うか」と自分の人生に対する混乱とフラストレーションの核を反映していると思われる質問を投げかけている。以前のセッションでは、R氏描画を通じて自分の世界をセラピストに見せ、彼女から絵に対する質問に答えるという形で、ほとんどの時間をモノローグ的な会話の形式で費やしているように見えた。しかし9回目のセッションでは両者が純粋に話し、オープンに聞くという、真正な対話に見える交流が行われたように見える。9回目と10回目（最後の面接）の間で、R氏は、自分の人生の中心となっている緊張とのバランスをとり前進するための方法を表した絵を描いている。

評者にとって、事例論文のこのセクションは、セラピーにおける対話の役割と重要性についての新たな理解につながる視野を開いてくれた（Seikkula, 2011）。例えば、対話的コミュニケーションは、治療同盟の亀裂といった激しく感情的なエピソードにおいて特に重要であり、大きなインパクトをもつだろう。セラピストが自らの境界についての立場を明確に表したら、（受動的にただ話を聞いているのとは反対に）もっと積極的に対話に参加することが可能になるだろう。また対話を十分に理解するには、言葉だけでなく行動についての説明も必要になるかもしれない。手紙を送ったり、セラピストとして仕事を続けられない、と決断するといった行為は、対話におけるパワフルな

表現かつ行為遂行的 (performative) な動きであり、何らかの返答を呼び起こす形で「人の心に届く」ものである。こうした可能性を証明することや、エビデンスをもって確証することは難しいだろう。しかし、上記の可能性は実践と研究の両方においてさらなる探求を行うための豊かな基礎を提供する。

## 内在化されたセラピストのイメージ

心理療法の一般的な目的は、クライアントが生活上の問題に、より効果的に対処できるようになる手助けをすることで、クライアントが充実感ある豊かな人生を送れるようにすることである。この目的を達成するためのプロセスのひとつに、クライアントが自分の中に内在化した、厳しく、批判的で自分を傷けるようなイメージや声を、セラピストの温かい声や存在で置き換える、というものがある。臨床家によく知られたこのプロセスの重要性は様々なアプローチの中でも認められ、数多くの質的、量的研究がなされ、様々な問題をもったクライアントの介入においてその重要性が実証的に示され、理論的にもより具体化されてきた (Bender et al., 2003; Geller & Farber, 1993; Knox, Goldberg, Woodhouse, & Hill, 1999; Mosher & Stiles, 2009; Rosenzweig, Farber, & Geller, 1996; Wachholz & Stuhr, 1999)。

そうした研究の文脈と比較しても、R氏のセラピストイメージの内在化の仕方は、以下の二点でとても特異だと感じる。一つ目は、セラピストの声がクライアントに即座の影響を及ぼす効果をもっているように思える点である。二つ目は、クライアント自身が内在化されたイメージの重要性を知っているように思えることである。三回目のセッションの後の電話での会話で、クライアントは以下のように報告している。

面接を終え、帰途に就くときは面接者の顔、声がやさしいものとしてこちよく残っている。帰宅して、時間の経過につれ、それが薄れ、怖い声、顔へと次第に変わっていく。怖くなって電話した。今、声を聴いたらイメージの顔も実物のものになった (p.J-32)。

私を知る限りこの部分は、クライアントが面接初期でのセラピストの内在化イメージを意識上にもつ治療的な価値に言及した瞬間を、初めて記録したものである。第一印象のもつ心理学的重要性は詳細に研究されてきたものの (たとえば, Gladwell, 2006), この話題は、これまで心理学の文献でほとんどふれられてこなかった。評者の学生の一人が行った、セラピストとの交流における関係性の深みの体験に関するクライアントへのインタビュー研究においても、協力者の多くが、最初からそのセラピストが自分に「合っている」ことに気がついているということがわかり、評者らは大変

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

驚いた (McMillan and McLeod, 2006)。R氏のケースは、クライアントが見せるそのような反応の極端な例を示しているとも考えられる。そしてこうした観察は、ナラティブ事例研究のもつ力の新たな例となり、今後の研究の方向性を示してくれるとともに、実践に基づく学びにつながる洞察を与えてくれる。

## クライアントの行動力に応答的である

セラピストの応答性は、近年、心理療法の理論と研究における主要テーマとして浮かび上がってきた (Stiles, Honos-Webb, & Surko, 1998)。セラピストの応答性には二つの異なるレベルがある。

「マクロ」レベルにおいては、クライアントがセラピーにより効果があったと報告するのは、セラピーの作業が自分に合っていたり、手法が自分にとって理解できるものであったり、最も自分の助けになると感じられるときだということが明らかになっている (Swift, & Callahan, 2009)。一方

「マイクロプロセス」でのセラピストの応答性とは、クライアントの意図に、セラピストが瞬時ごとに適切な応答をする点にある (Stiles et al., 1998)。これら二つのレベルの分析により、クライアントの主体性や、「能動的なクライアント」 (Bohart and Tallman, 1999) という観点は、セラピーにより結果をもたらす要素であることが明らかになった。人は自らの強さやリソースを活性化し、使用しながら、自らの課題に取り組むのである。

Rのケースは主体性に満ちていると考えられる。村瀬氏 (2015) は、主体性という概念にはふれていないが、代わりに「行動力 (p.J-41)」という概念を用いている。R氏は村瀬氏を自分のセラピストと決めた。彼はセッション間隔を決め、セッション間のコンタクトを主導している。また彼は、セラピー中断後セラピストに対し、自分に会ってくれるように説得した。またセラピーの終結をいつにするかも決めている。セラピー終結後は、精神病院に入院することも決める。彼は自分の人生の方向性について新しい選択をしたのである。また最初の面接で、村瀬氏がR氏に絵を描いてセッションにもってくることを提案した点も興味深い。村瀬氏にとってこの介入は、R氏との間の「抽象的」で「上滑り」な議論の泥沼にはまるのではなく (p.J-28)、彼の積極的で主体的な感情の力と動機付けにアクセスするための方略として意図された。

R氏の能動的な力に一貫性があり効果的な方法で接触し、セラピストはそれについていく、という村瀬氏のとった方法が、日本における心理療法の実践全般に特徴的なものなのであろうか、と評者は考えた。本論文の中では、こうしたスタイルのもつ文化的側面にはふれられてはいない。しかし評者には、R氏とセラピストの間のこうしたプロセスが、日本の精神文化や武道文化の伝統の中にある「気 (エネルギー、あるいは生命力)」の原理の使用と多くの点で似ているように思われた。

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

合気道の教室での、敵のエネルギーを他の方向にさりげなくかわすことができるかどうかで、我々の技術が効果的かどうかわかる、という「先生」の言葉が思い出された。

評者は、クライアントの主体性と、心理療法のプロセスおよび効果に対する個人的好みの影響に興味があるセラピスト全てに、R氏のケースを読むことを勧めたい。これらのトピックに関する英語文献は、言葉や会話による実践、つまりメタコミュニケーションや、セラピーの目的と方法に関するクライアントとの協働的な同意などによって、クライアントの主体性を拡張することに焦点を当てるものが多い。対照的にR氏のケースでは、少なくとも論文中に記載されたセラピーの出来事を見る限り、会話によってクライアントの主体性・能動的な力に働きかけたり、自身の強みについてクライアントに内省を促したりすることはない。その代わりに、多くの場合クライアントのエネルギーが導くところにセラピスト自身は身をゆだねている。

## 理論的示唆

R氏のケースは、心理療法の事例研究のジャンルとしては、主にナラティブ事例研究であり、セラピストの視点からセラピーの話が語られている。また、クライアントとの作業を導く専門的な知識が論文中に説明されている点を考えれば、実践的事例研究であるとも言えよう。一方でこのケースは、理論構築型事例研究 (Stiles, 2007) のように、新しい概念を生むために事例の素材が使われるような種類の事例研究ではない。しかし評者自身は、この事例論文を読む中で、理論的に試されるかのようなパワフルな感覚を感じ、評者の実践を導く概念や想定を拡張、延長するような思考に引き込まれるのを感じた。そうした理論的省察のいくつかは、既にこの論文の前段で考察したが、さらなる理論的学びとして評者にとって特筆すべき点は、*理論的流動性*と*コミュニケーションチャンネル*の概念の重要性にある。

村瀬 (2015) によって書かれたR氏の事例論文は、心理療法理論に見られる多くの考え方や概念を含んでいる。受容、コミュニケーション、つながり、文脈、共感、気持ち、想像、可能性、潜在力、妥協、尊敬、自己実現、治療関係、セラピー／臨床的空間と時間などがその例である。しかし実際に参照される理論は、形式と構造をもった概念のシステムとして理解されるクライアント中心理論 (Rogers, 1951, 1961) ただ一つである。評者自身の見方でいえば、このケースで起こったことを、クライアント中心理論、あるいはヒューマニスティック理論を単純に適用したものとして理解すること (あるいはそう主張すること) はできない。筆者のロジャース (1951,1961) に対する言及が、読者の理解を促進するための理論軸を提供するためのものなのか、それとも実際にセラピストがクライアント中心療法に一つの核となる理論基盤を置いているのか、評者にはよくわからなかつ

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

た。あるいは、本来日本で発展した別の心理療法理論に根ざした他の理論的説明が提供されたことがあったが、文字数制限上、英語圏読者に説明するのが難しく、この事例報告に含められなかったのだろうか、とも考えた。

村瀬（2015）の R 氏のケースにおける理論活用方法への、評者の一個人としての反応に話を戻す。本事例の中には、理論が“if-then”命題からではなく、原則から形成される際にあるべき姿が提示されているのではないかと、ということに評者は徐々に気づいていった（Levitt, Neimeyer & Williams, 2005）。原則は固定化されたヒエラルキー構造の中に組織化されるよりもむしろ、認知空間内を巡る立場の表明からなる。また「原則（principle）」という概念は、そうした立場について常に内省しつつ、いかなる瞬間や文脈下でも、自分がどう行為すべきか選択できる能力をもつ「原則に則った（principled）」人の存在も示唆する。原則は価値観や倫理的姿勢によって支えられている。この観点は、急進的な現代思想である、社会的、政治的、経済的等、全ての意思決定基盤の再概念化という思想にも対応している（Nussbaum, 2013）。

村瀬（2015）の論文は、理論が実際の臨床でどのように使われるかを誠実に説明している。そしてこの点はカウンセリングや心理療法の領域全体にとって非常に価値があると強く感じる。同様の理論的流動性は、Polkinghorne（1992）や Oddli & Halvorsen（2014）が行った、臨床実践における理論の活用に関するセラピストへのインタビュー研究の中に、その一端が見られる。実際、特定の理論への傾倒をどのように形容しようと、ほとんどのセラピストは様々な理論から概念を取り入れて使っている（例えば Thoma and Cecero（2009）を参照）。しかし、セラピストがそうした実践に自分の名前をつけて説明する例を、これまで発表されてきた論文の中に見つけることは稀である。実践における理論の役割に関して村瀬（2015）が示した最も重要なポイントは、論文の最後に置かれた「もっとも適切な心理療法実践は、理論、方法、客観性、人としてのかかわりの統合である（p.J-47）」という彼女の意見だと評者は考えている。この主張は心理療法統合の性質を理解するための重要な示唆を含んでいる。つまり心理療法の統合とは、単に思想を統合し多様な手法や技法を使えるようにするだけのものではなく、常に人としての個人的な側面を含むのである。極めて重要なのは、この個人的な側面が、個人として関わることと客観的であることの間にある、二極性や緊張について継続的に考え続ける必要性の上に成立していることだ。R 氏のケースは、心理療法のプロセスの中にこれらの原理が確実に注ぎ込まれるようにするためにセラピストの側に必要な、そうしたタイプの流動的な動きをととても効果的に描写している。

理論について理論化することから先に進むと、村瀬（2015）が使った理論の枠組の中に、コミュニケーションチャンネルという考えが中心的な重要性をもって現れているように見える。評者を含め、

セラピストの多くはクライアントとの間に安全なコミュニケーションチャネルを構築することが必要だと考えている。しかしそれは行動の変容や洞察、語り直すこと、自己受容やスキル学習といったセラピーの真の仕事に先行するものとしてのみ位置づけられる。対照的に村瀬（2015）にとっては、コミュニケーションチャネルこそが、本当のセラピーの作業であった。彼女はコミュニケーションチャネルの構築プロセスをいくつかの側面から描いている。彼女の注意はクライアントがどうすれば一番いい形でコミュニケーションできるかに向けられ、R氏にとってその方法が描画であり、描いた絵について話すことであることが明らかになる。「人のところに届く言葉、その人のためにそのとき、その場で意味をもつ言葉、どうしたらそういう言葉を持つことができるのか。（p.J-46）」、セラピストの注意はこの問いに向けられている。こうした言葉は、セラピーが行われる日常やもっと幅広い社会や文化の文脈の中で真実でなくてはならず、クライアントのコミュニケーションスタイルや趣向にあった言語や会話の形式をとってなくてはならない。こうした言葉はまた偽りがなく、セラピストの純粋な気持ちや信念を反映してなくてはならない。「しかも用いられる言葉は、セラピストの身体を潜らせて自身が本当に納得した言葉になったものであることが必須である（p.J-23）」。

コミュニケーションチャネルは双方向に働くものである。まず、クライアントはそれまで語られていなかった体験を語る。そして、閉じ込められていた自分の世界から出て、もう一人の人物（セラピスト）に出会うようになる。この最初の結果に続いて、他のプロセスが展開し始める。やがてクライアントは自分の内部と外部との間で、豊かな対話をもてるようになる。また、それまで自分の機能不全なパターンを維持するためだけに使うか、もしくはただ抑圧してきた自分自身のエネルギーや強み、潜在力を使って、自分自身の人生の新しい方向性を、創造的なやりかたで構築できるようになる。

これらが、村瀬（2015）がコミュニケーションチャネルという概念に対して与えた意味に対する評者なりの理解である。コミュニケーションチャネルをこのように理解することで、効果的なセラピーという行為が、ほんの少数でも効力をもち記憶に残る対話や出会いの瞬間に凝縮されているという見方ができるようになる。のちにクライアントの中に内在化されることになる「兵士になりたいか？」とセラピストに尋ねるエピソードがそのいい例である。

## 結論

このコメントで目指したのは、ナラティブ事例研究の性質について議論し、R氏のケースを通じて評者自身が得たいくつかの実践に基礎をおく学びについて考察することであった。本コメントを

通じて、ナラティブ事例研究が、これまで他の形式の心理療法プロセス研究や効果研究であまり明確に語られてこなかった領域を探求するために有益であることを、説得力をもって示せたことを願う。今後より多くの人に、村瀬（2015）や他のナラティブ事例研究の筆者に続く形でこの形式での論文を発表することを勧めたい。

最後のコメントとして、これまでふれてこなかった二つの点に焦点を当てていこうと思う。それは、語り手と聞き手についてである。

語り手である村瀬氏は、頻繁に自分自身を文章の中に登場させている。読者は彼女がどんな人か、彼女に人生にどんなことが起こったか、あるいは、ケースのあった時期や、自分のキャリアを振り返る現時点の彼女について、ある程度知ることができる。時折挿入される、彼女の注意深く、控えめな一人称の文体は、読者の人生と筆者の人生をつなぎ、書かれている内容に入り込むことを容易にしていると感じる。さらに筆者の文章スタイルの中で特筆すべきは、「おののきつつ臨床現場にあって (p.J-46)」といった説明で、常に自らのためらいと謙虚さを見せていることである。現代の心理療法研究において、効果的なセラピストの特性は何かという問いは主要なテーマの一つである。この領域で高い影響力をもつ Nissen-Lie ら（2013）の研究の結果でも、最も成功するセラピストとは、プロとして自分についての疑いを最もよく見せる人たちだったことがわかっている。R氏のケースの中でも、筆者の描写の中に、プロとしての自分自身への疑いが、一本の糸のように常に存在していた。この特徴こそが、R氏のケースの読者に対する信頼性を高めていたと評者は思う。セラピーの事例研究を読む人は、効果的なセラピーをすることがとても難しいことを知っている。それゆえ、自分のモデルの正当性やスキル、専門性の深さについて揺るぎない自信をもち、自らの実践について権威的な雰囲気を書く論者のことを、あまり信用しないだろう。またセラピストの介入における個人的な側面について、説得力をもって書くための唯一の方法は、自己に対する疑いを語ることによってだけなされる。そうした点からも、R氏のケースはアメリカ心理学会の執筆要項や本誌の論文の構造と明晰さを保ちつつ、適切なレベルの批判的内省性をもった論文を書くためのよい例を示してくれている。

R氏のケースの語り手のアイデンティティに関する、もう一つの重要な側面は、彼女が現在は経験豊かで高い評価を得ているセラピスト・著者であり、自らの仕事を英語圏の読者に向けて伝えるために、このケースを選んだという点である。彼女のこうした経歴は、この事例研究の書かれ方も相まって、本事例を専門的英知の表れとして高く評価することを可能にしていると思われる。本ケースは、最近の仕事として省察されたり、未来に向けたアイデアを生み出すためのものとして提示されたりはしていない。それよりも、彼女がキャリアを通じて得た学びを描く方法の一つとして

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

提示されている。この点から、R氏のケースは近年関心が高まり文献も増えている、セラピストの英知 (therapist wisdom: Levitt, & Piazza-Bonin, 2015; Rabu and McLeod, submitted) というトピックに貢献するものとしても読むことができる。こうした「専門的な英知」をもつ事例研究は、Fishman (1999) によって紹介されたような、専門家の知識に関する幅広い研究テーマの中で、エビデンスのカテゴリの一つとして将来重要なものとして捉えられるようになるだろう。これまで、特定のクライアント群とのセラピーの中でセラピストが使う実践的方略や概念に関する分析は、実践的事例研究も含め数多くなされてきた。英知に関する研究は、そうした研究を一步先に進める。英知は、専門家の仕事の一側面の省察結果というだけではなく、ある専門家の、人生を通じての専門的実践全体に対する省察の結果として生み出されるものである。セラピストの英知研究の特筆すべき特徴の一つは、それらが、実証的にその妥当性を証明されたセラピーに関する文献とは合致しないようなセラピーのプロセスと効果に対して、繊細で控えめだが、幅広く「統合的な」理解を生み出すことである。例えば、英知を備えているセラピストとして同僚から指名されたセラピストにインタビューを実施した Levitt & Piazza-Bonin (2015) の研究では、彼らが曖昧さや不確かさを受け入れることを厭わないということが重要なテーマとして見出された。

この論文を締めくくる言葉として、事例研究における読み手の役割について述べたい。セラピーに関する実践的知識の構築に向けた、開かれた多元的な方法論アプローチの文脈において、事例研究の全ての形式が、多くを提供できると考えている。しかしながら、そうしたことを実現するためには、臨床家が事例研究を読む必要がある。今後考えるべきテーマとして示唆したいのは、異なるタイプの研究報告を読む体験に関するものである。多くのセラピストは、「大量のn数」をもつ量的研究をメインにしたトレーニングを受け、アメリカ心理学会の執筆要項に準拠した論文を読むスキルを向上させていく。こうした研究論文の内容は、いくつかの鍵となる発見に凝縮され、要旨に要約された上で、その詳細が論文本文の各節でより詳しく説明される。読者はそれにより、研究内容をより素早く分解、吸収することができる。論文全体を読む必要が出てくるのは、一般的にそうした発見の一部がわかりにくかったり、予期せぬものだったりするときだけである。対照的に質的研究や事例研究では、テキスト全体を注意深く読んだ結果として知識が生み出される。本コメントを通じて、私自身がR氏のケースから学びを得るため、細かい箇所のもつ潜在的な意味に対し、いかに注意深く創造的な省察を行う必要があったかを示そうとしてきた。またさらに、そうした細かい箇所がケース全体の文脈や、評者のもつ知識と理解の文脈においてどのような意味を持ちうるかを、自分自身に問いかけたいと思ったことも示してきた。こうした種類の読み方は時間がかかる。評者の学生に向けても、一つの事例研究を読むワークショップを行い、それを小さなグループで話



し合う時間をもっている。こうしたアプローチを行うことによって、ケースに対する省察のペースがゆったりとしたものになり、複数の観点を生み出すことができる。研究が実践に与える影響についての理解を構築するために、学生や臨床家がそうした研究論文を読んでいるかということだけでなく、どのように読んでいるかに関する研究や、異なる読み方が、どのような学び（そして応用）につながるのかに関する研究を行うことも価値があると考えている。

臨床家が事例研究を読むだけでなく、その著者が、読者の興味をひくように論文を書く必要があるし、彼らが必要とする情報を提供する必要がある（McLeod, 2015）。そのためには、読者と筆者の間にコミュニケーションチャンネルが必要である。他の多くのジャーナルに比べ、本誌「*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*（心理療法における実践的事例研究）」は、その点に関して少し先取的で、原著論文に対してコメントを発表し、著者がそれに対して回答できるようになっている。しかし、現代のテクノロジーはさらに幅広い筆者と読者間の対話をも可能にしている（たとえば, Nosek & Bar-Anan, 2012）。このような対話に関する時代の流れに基づき、ここでは評者自身を心理療法コミュニティの一代表として考えたい。ここまでの部分では、評者自身が R 氏のケースに対する応答をまとめて述べる機会を得てきたが、最後に他の読者の頭に浮かんだであろう質問をいくつか挙げ、そこに対する筆者からの返答を期待しつつ本論を締めくくりたい。どんな事例研究も筆者の手にある大量の情報と、論文発表のフォーマットの間での妥協の結果生み出される。R 氏のケースは、間違いなくケースの豊かな描写を提供している。しかし、以下の点についてももう少し知ることができれば、さらに有益ではないかと考える。

1. クライアントとセラピストの間で目的について同意することが、ポジティブな効果を生むことについて、相当数のエビデンスがある。R 氏とはセラピーの目的または目標について話し合うことはあったのだろうか。その場合、それはいつ行われ、彼は何を目標として同定したのだろうか。
2. 特に R 氏のような、それまでのセラピーでは解決できなかったような長期にわたる複雑な困難を抱えたクライアントと仕事するにあたって、臨床的スーパービジョンがどのような役割を果たしたのか、という点に興味がある読者は多いと思う。筆者はどういった種類のスーパービジョンやコンサルティング的サポートを受け、それはセラピーのプロセスにおいてどんなインパクトを与えていただろうか。
3. このケースにおいて、描画の使用が非常に効果的な側面をもっていた。どうしてクライアントに描画の使用を勧めようと思ったのだろうか。その当時、全てのクライアントに同じこと

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

を勧めていたのだろうか。筆者はその技法を「相互似顔絵法」と説明しているが、この技法についてもう少し詳しい情報や、英語での文献、あるいはその技法がどのようなものを含むのかを教えてもらえないだろうか。

4. 電話での最初の接触の瞬間からの、R氏の筆者に対する愛着の強さをどのように理解しているのだろうか。

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

## 文献

- APA (2009). *Publication manual of the American Psychological Association, 6th edition*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Bender, D.S., Farber, B.A., Sanislow, C.A., Dyck, I. R., Geller, J. D., & Skodol, A. E. (2003). Representations of therapists by patients with personality disorders. *American Journal of Psychotherapy, 57*, 219–236.
- Berger, J. (1973). *Ways of seeing*. Harmondsworth: Penguin.
- Berger, R., & McLeod, J. (2006). Incorporating nature into therapy: a framework for practice. *Journal of Systemic Therapies, 25*, 80-94.
- Bohart, A. C., & Tallman, K. (1999). *How clients make therapy work: The process of active self-healing*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Dreier, O. (2008). *Psychotherapy in everyday life*. New York: Cambridge University Press.
- Fishman, D.B. (1999). *The case for a pragmatic psychology*. New York: New York Universities Press.
- Gass, M.A., Gillis, H.L. and Russell, K.C. (Eds).(2012). *Adventure Therapy: theory, research, and practice*. New York: Routledge.
- Geller, J. D., & Farber, B. A. (1993). Factors influencing the process of internalization in psychotherapy. *Psychotherapy Research, 3*, 166–180.
- Gladwell, M. (2006). *Blink: the power of thinking without thinking*. London: Penguin.
- Henretty, J.R., & Levitt, H.M. (2010). The role of therapist self-disclosure in psychotherapy: A qualitative review. *Clinical Psychology Review, 30*, 63–77.
- Knox, S., Goldberg, J. L., Woodhouse, S. S., & Hill, C. E. (1999). Clients' internal representations of their therapists. *Journal of Counseling Psychology, 46*, 244–256.
- Lazarus, A.A., & Zur, O. (2002). *Dual relationships and psychotherapy*. New York: Springer.
- Levitt, H.M., Neimeyer, R.A., & Williams, D.C. (2005). Rules versus principles in psychotherapy: Implications of the quest for universal guidelines in the movement for empirically supported treatments. *Journal of Contemporary Psychotherapy, 35*, 117-129.
- Levitt, H.M., & Piazza-Bonin, E. (2014). Wisdom and psychotherapy: Studying expert therapists' clinical wisdom to explicate common processes. *Psychotherapy Research*, Available online, August 1, 2014, DOI: [10.1080/10503307.2014.937470](https://doi.org/10.1080/10503307.2014.937470)
- McLeod, J. (2010). *Case study research in counselling and psychotherapy*. London: Sage.
- McLeod, J. (2014). *Doing research in counselling and psychotherapy*, 3<sup>rd</sup> ed. London: Sage.

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

- McLeod, J. (2015). Reading case studies to inform therapeutic practice. *Psychotherapie Forum*, 20, 3-9.
- McMillan, M. and McLeod, J. (2006). Letting go: The client's experience of relational depth. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 5, 277-292.
- Mosher, J.K., & Stiles, W.B. (2009). Clients' assimilation of experiences of their therapists. *Psychotherapy Theory, Research, Practice, Training*, 46, 432-447.
- Murakami, H. (2002). *Underground: The Tokyo gas attack and the Japanese psyche*. London: Vintage Press.
- Murase, K. (2015). The art of communication through drawing: The case of "Mr. R," a young man professing misanthropy while longing for connection with others. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, 11 (2), Article 2, pp. 81-116. Available: <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>
- Nissen-Lie, H.A. Monsen, J.T., Ulleberg, P. & Rønnestad, M.H. (2013). Psychotherapists' self-reports of their difficulties and interpersonal functioning in practice as predictors of patient outcome. *Psychotherapy Research*, 23, 86-104.
- Nosek, B. A., & Bar-Anan, Y. (2012). Scientific utopia: 1. Opening scientific communication. *Psychological Inquiry*, 23, 217-243.
- Nussbaum, M.C. (2013). *Creating capabilities: The human development approach*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Oddli, H.W., & Halvorsen, M.S. (2014). Experienced psychotherapists' reports of their assessments, predictions, and decision making in the early phase of psychotherapy. *Psychotherapy*, 51, 295-307.
- Parry-Jones, W.L. (1981). The model of the Geel lunatic colony and its influence on the nineteenth-century asylum system in Britain. In A. Scull (Ed.). *Madhouses, mad-doctors, and madmen. The social history of psychiatry in the Victorian era*. (pp. 201-217). London: Athlone Press.
- Polkinghorne, D. E. (1992). Postmodern epistemology of practice. In S. Kvale (ed.) *Psychology and Postmodernism*. (pp. 125-137). London: Sage.
- Quinn, M.C., Schofield, M.J., & Middleton, W. (2012). Successful psychotherapy for psychogenic seizures in men. *Psychotherapy Research*, 22, 682-698.
- Revell, S., & McLeod, J. (2015). Experiences of therapists who integrate walk and talk into their professional practice. *Counselling and Psychotherapy Research*. Article first published online: Sept. 24, 2015, DOI: [10.1002/capr.12042](https://doi.org/10.1002/capr.12042)
- Riessman, C.K. (2008). *Narrative methods for the human sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.

J. McLeod

*Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, <http://pcsp.libraries.rutgers.edu>

Volume 11, Module 4, Article 2-J, pp. J-107 to J-127, 12-31-15 [copyright by author]

- Rosenzweig, D.L., Farber, B.A., & Geller, J.D. (1996). Clients' representations of their therapists over the course of psychotherapy. *Journal of Clinical Psychology, 52*, 197-207.
- Safran, J.D., Muran, J.C., & Eubanks-Carter, C. (2011). Repairing alliance ruptures. In J.C. Norcross (Ed.), *Psychotherapy relationships that work. Evidence-based responsiveness*. (pp. 224-238). New York, NY: Oxford University Press.
- Seikkula, J. (2011). Becoming dialogical: psychotherapy or a way of life? *Australian and New Zealand Journal of Family Therapy, 32*, 179-193.
- Stiles, W. B. (2007). Theory-building case studies of counselling and psychotherapy. *Counselling and Psychotherapy Research, 7*, 122-127.
- Stiles, W. B., Honos-Webb, L., and Surko, M. (1998). Responsiveness in psychotherapy. *Clinical Psychology: Science and Practice, 5*, 439-458.
- Swift, J. K., & Callahan, J. L. (2009). The impact of client treatment preferences on outcome: a meta-analysis. *Journal of Clinical Psychology, 65*, 368-381.
- Thoma, N. C., & Cecero, J. J. (2009). Is integrative use of techniques in psychotherapy the exception or the rule? Results of a national survey of doctoral-level practitioners. *Psychotherapy, 46*, 405-417.
- Vygotsky, L. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological process*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wachholz, S., & Stuhr, U. (1999). The concept of ideal types in psychoanalytic follow-up research. *Psychotherapy Research, 9*, 327-341.
- Yalom, I.D. (2002). *The Gift of Therapy: Reflections on Being a Therapist*. London: Piatkus.